(3)第1部第1分科		
氏名	伊藤邦武（いとう　くにたけ）	
現職等	龍谷大学文学部教授、京都大学名誉教授	
専攻学科目	哲学	
主要な学術上の業績	伊藤邦武氏は、近現代の哲学において重要な潮流であるアメリカ・**プラグマティズム**の研究から出発し、それと並行して展開されたヨーロッパの哲学、とりわけ19世紀後半から20世紀のフランス**認識論**の歴史的研究、さらには宇宙論と経済学に関する科学哲学的研究に取り組み、大きな成果を挙げてきました。そこに一貫して通底しているのは、次の2つの問い、すなわち、哲学は科学研究を特徴づける実証性と人間に内在する超越への希求の関係をいかに反省し、どのように両者を統合して体系的思想を構築しようとしたかという問い、次に、人間の認識と行為は不確実性を免れませんが、それにもかかわらず、それについて**蓋然的な信念**を形成し、合理的に振舞うことができるという事態を哲学がいかに考え、分析してきたかという問いです。これらの問いを、広くまた深い哲学史的探求を通じて考え抜くことによって、伊藤氏は、「思考」と「行為」を決して分離せず、科学的な実証性と形而上学的な思弁性の総合を目指すプラグマティズムの精神を体現し、現代における哲学のあるべき姿を指し示していると言えます。 【用語解説】 プラグマティズム 19世紀後半以降、アメリカを中心に展開された哲学思想。デカルト以来の意識中心の立場を退け、現実の生における具体的な行為の中で精神活動が果たす役割を見る視点に立って、そこから科学論・道徳観・存在論を改変し直そうという思想。パース、ジェームズ、デューイらによって創始され、現在では分析哲学との結びつきを強めてクワイン、ローティらのネオ・プラグマティズムに引き継がれている。 認識論 認識の起源・本質・方法・限界などについて研究する哲学の一部門。伊藤氏は、最近著『フランス認識論における非決定論の研究』（晃洋書房、2018年）で、ブートルー、ポアンカレ、デュルケームに焦点を絞ってフランス認識論の特質と現代的意義を考察している。 蓋然的な信念 不確定で偶然的な事柄について形成され、行動の指針となる本当らしい見解。例えば、天気予報の降水確率を参考にするのは、蓋然的な信念に従って行動することである。	